俳句文学館

発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3—28—10
便郵番号160
電話（03）367—6621（代）
発行人　草間　時彦
定価 100円（送料別）
（年 1.000円送料300円）
振替口座東京
6—273番

〝雲間〟の会場で発展へ始動

俳人協会第七回通常総会

水原氏、名誉会長に

理事長には草間氏新任　新会長に大野氏

通常総会の会場風景

記念品（目録）を受ける水原名誉会長

社団法人俳人協会の昭和五十二年度（第七回）通常総会は、二月二十五日（土）午後一時三十五分から、東京・浜松町の世界貿易センタービル三十九階チェリールームで開催された。

53年度は　会員5千人へ

東京の空はやや雲の多い日であったが、開会近いころになると、青空がひろがり雨の心配はなくなった。同ビル名物の四十階の展望台からは眼下にひろがる羽田国際空港をはじめ東京のビルの群が一望に見渡すことができた。

定刻になると出席予定の一七〇名の会員がぞくぞくと集まり、司会の山崎ひさを幹事から三、三五〇名の委任状の提出があるため本総会の成立することが宣言され、ただちに総会に入った。

定款に基づき総会の議長には水原会長の代理として大野林火副会長が議長席に着席、畠山譲二、堀喬人両氏を議事録署名人の同意を得てから、安住敦理事長によって一般報告および新年度の展望について概要説明が行われた。その中でとくに昭和五十二年十二月三十一日現在の会員数四、六七四名に対し新年度には約五〇〇名の新会員を迎える予定であり、会員数五、〇〇〇名を越す団体になるといわれ、役員組織の拡充、事業の伸展などにもふれられ、各議事に対する協力のお願いをもって結ばれた。

第一号議案「昭和五十二年度事業報告および決算」について、草間時彦、松崎鉄之介両理事からそれぞれ事業、決算について詳細な報告が行われた。

なお松崎理事からは会費納入率が九十三%を越し、この種の団体として極めて高率であることが付言された。続いて五所平之助監事から、遠藤梧逸、細井芒角星の両監事とともに会計証拠書類を厳重に監査した結果、いずれも正確であることが報告された。満場異議なく承認および可決された。

地方組織の整備へ

第二号議案「昭和五十三度事業計画案および予算案」についても前記両理事から報告があり、とくに「地方会員のつどい」（仮称）に重点をおき地方組織をととのえたいとの説明があった。なお会場から、三号議案とあわせて可決すべき動議があり、議長了承、続いて三号議案の説明に入った。

会費値上げ承認

第三号議案「定款変更に関する件」は岸風三楼理事が説明に立ち①会員に関する件、正会員の入会金を一五、〇〇〇円から二〇、〇〇〇円に、正会員年会費を五、〇〇〇円から八、〇〇〇円に、また一時に一五〇、〇〇〇円の納入者は爾後の年度会費の納入を要しないこと②役員および職員に関する件、理事十二名以上十五名以内とあるのを十五名以上十八名以内にすること③顧問、評議員および幹事の件、名誉会長を推戴することができるというように変更することの案について懇切な説明があった。ことに会費値上げについては岸理事のせつせつとうったえる説明も手伝ってか、二号、三号議案ともに満場一致で承認および可決された。

第四号議案「役員改選に関する件」については大野議長から、理事、監事の任期満了によって新理事・監事の選任について議長一任をはかり、了承後ただちに新理事十八名、大野林火・安住敦・皆吉爽雨・有働亨・岸風三楼・福田蓼汀・草間時彦・松崎鉄之介・香西照雄・沢木欣一・柳田静爾楼・進藤一考・古舘曹人・村山古郷・鷹羽狩行・原裕・村田脩・森田峠のそれぞれを新理事とし、監事再任の案を総会にはかり満場一致の同意を得た。これにより別室において理事の職務の互選が行われるため小憩に入った。小憩後、大野林火新会長以下、理事の職務（別掲）が発表され、満場の拍手を浴びた。

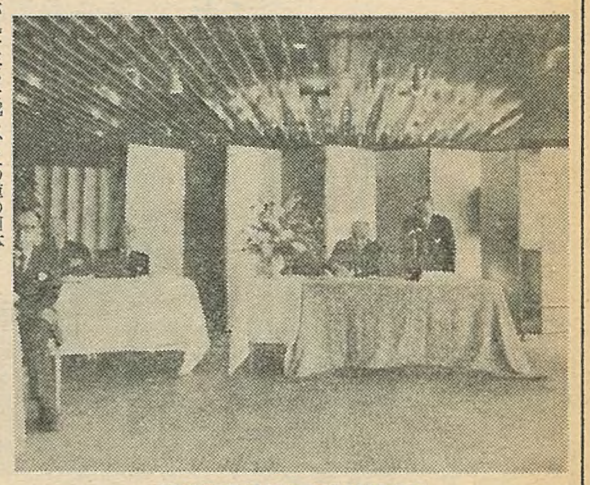
第五条議案「名誉会員・顧問等の推薦に関する件」については岸理事から、定款変更に基づき水原秋桜子名誉会長、中村汀女、星野立子顧問、石塚友二、平畑静塔名誉会員案が提出され、満場の拍手とともに承認および可決された。

以上をもってすべての議案の審議をおわり、大野議長は議長席をおりた。

水原秋桜子新名誉会長には長年の労苦に対して協会から感謝の花束と記念品がおくられた。これに続き第十七回俳人協会賞、第一回俳人協会新人賞の授与に移り、受賞者卜村ひろし、鍵和田秞子両氏に水原前会長の賞状および副賞が新名誉会長から授与された。

審査員を代表して皆吉新副会長から受賞経過、両氏の紹介、作品評などを含めてお祝いの言葉がのべられた。このあと両氏から謝辞があって、予定時刻の三時三十分に総会および授与式をともに終了することができた。

四時から再び席をととのえ、有働理事の司会により、懇親会が開催され、水原新名誉会長の挨拶、中村草田男顧問の乾杯、井本農一氏の祝詞とつづき、和気あいあいのうちに交歓のつどいが続いた。



一般報告を行なう安住前理事長

社団法人　俳人協会新役員一覧

（敬称略）

名誉会長　水原秋櫻子
顧問　富安風生
　　阿波野青畝
　　野村喜舟
　　山口誓子
　　山口青邨
　　中村草田男
　　中村汀女（新任）
　　星野立子（新任）
名誉会員　阿部みどり女
　　石塚友二（新任）
　　平畑静塔（新任）
会長　大野林火（新任）
副会長　安住敦（新任）
　　皆吉爽雨（新任）
理事長　草間時彦（新任）
常務理事　有働亨
　　岸風三楼
　　福田蓼汀
　　香西照雄
理事　澤木欣一
　　進藤一考
　　古舘曹人
　　松崎鉄之介
　　柳田静爾楼
　　鷹羽狩行（新任）
　　原裕（新任）
　　村田脩（新任）
　　村山古郷（新任）
　　森田峠（新任）
　　遠藤梧逸
　　五所平之助
　　細木芒角星

春夏秋冬

現代の一年は、古代エジプト時代の千年に当たる、という記事を読んでもう十年になる。俳句に関係なく、時代は急速に進む。新年に「ゴキブリ退治薬」のテレビCMが出たときはいくらなんでも早過ぎると怒った。が、二月はじめ、わが家の物置掃除でゴキブリが逃走したと聞いた。呆然である▲魚にも果物にも〝シュン〟がなくなってきた。真冬の店頭に、京菜と共にキュウリ、ナス、トマトが山積みされていた。当季雑詠といわれても迷うのではないか。都会の雪を窓に、生ビールを飲ませる店も多くなっている▲いま、入試だけなわ。句会に出ても「試験」「受験」の句が多いが、さすがに「大試験」の季語は出ない。時代と季語の明らかなズレである。「俳句とエッセイ」3月号で、高柳重信は「春一番」は戦後派と記している。ゴールデン・ウィーク、ナイターも、戦後派である▲一九六九年、人類は月に到達した。春の月を見ても、たしかにイメージは変わった。月旅行にでもなったら賑やかだろうが、新季語もマスプロ化されるだろう▲嫌な世相に、とテレビのチャンネルをひねると慶村風景。それがなんと、トラクターによる麦蹈みであると知って、まさしく驚愕した。やがて、歳時記の大改訂が、五年毎に、などということにならねばよいが——。（昌）

（岡田日郎）

古い俳諧の世界から、俳人の美意識を解放した
秋櫻子の全著作の集大成！
■第5回配本＝二月二十日発売
第四巻　句集四
玄魚、蓬壺、旅愁、晩華
水原秋櫻子全集
講談社版　全二十一巻
■定価各巻二、九〇〇円
●全巻編成
第一巻　句集一
第二巻　句集二
☆第三巻　句集三
第四巻　句集四
第五巻　句集五
第六巻　俳論
第七巻　作家論
第八巻　古典評論
☆第九巻　鑑賞一
第十巻　鑑賞二
第十一巻　鑑賞三
第十二巻　美術評論
☆第十三巻　自句自解
☆第十四巻　入門・吟行・添削
第十五巻　俳句作法
第十六巻　随筆一
第十七巻　随筆二
第十八巻　紀行
第十九巻　自伝回想
第二十巻　日記
第二十一巻　雑纂
☆印既刊
講談社

眼でみる歳時記の超集大成
図説　俳句大歳時記
■普及版　■全五巻　■B5判平均六〇〇頁
春・冬・新年　三六〇〇円／夏・秋　四二〇〇円

実用歳時記の決定版
新版　俳句歳時記
A5判　一一六六頁
定価　一五〇〇円

俳人必携の軽装版
角川版　季寄せ
A6判　四五四頁
定価　一〇〇〇円

〒102　東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三
角川書店
（電話）〇三—二六五—七一一一

懇親パーティー スナップ

芝浦、品川方面の眺望を眼下に、飲み、食い、歓談する参会者

歓談する（左から）水原秋櫻子、井本農一、中村草田男の三先生

新人賞受賞の喜びをわかつ中村、鍵和田の師弟

パーティーで語り合う右から福永耕二、堀口星眼、下村ひろし

三月集

白魚舟　五所平之助（静岡）

一と廻りして座を決めぬ白魚舟
白魚の生けるを食ふべ割り切れず
白魚鍋酔余の筆に墨を濃く

雪山行　津田　清子（奈良）

雪山行雪喰べて喉うるほして
山の水楮を晒しつつ下る
紙漉の白息手湯も湯気立てて

冬の潮来　村松　紅花（東京）

とかくしてしつらへくれし舟炬燵
舟炬燵しつらへ舟のやゝ傾ぎ
とある町のとある枯木を親しみぬ

雪の椴　千葉　仁（小樽）

着ぶくれて遅延列車を降りくるよ
雪撒きて床掃く仲仕溜りかな
湯の宿の裏手すなはち雪の椴

流し雛　田淵十風子（広島）

さすらひはいましのみかは流し雛
水底に神居りて蜷歩ましむ
いくばくを日本の土となるか霾

水原名誉会長が百万円を寄付

俳句文学館図書購入費に

水原秋櫻子俳人協会名誉会長は総会の席上、俳句文学館図書購入資金として、金百万円を俳人協会にご寄付された。

これにつき、沢木図書委員長はつぎのように語った。

「こちらからお礼を申し上げなければならないのに、多大のご寄付をいただいてしまって感謝にたえません。水原先生には、前々から何かとご寄付をいただいています。せっかくのご厚意ですから、ありがたくいただいて、まとまった図書を購入、水原秋櫻子文庫としたいと思います」。

総務は岸理事担当

理事の業務分担決まる

俳人協会理事会は三月四日開かれ、理事会内部における理事の担当業務を、次のとおり決定した。

▽総務　○岸風三楼　進藤一考
▽財務　○柳田静爾楼　福田蓼汀　松崎鉄之介　古館曹人　鷹羽狩行
▽事業　○進藤一考　原裕　鷹羽狩行　村田脩　森田峠
▽組織　○有働亭　安住敦　皆吉爽雨　岸風三楼　森田峠　沢木欣一
▽図書　○沢木欣一　村山古郷　香西照雄
▽年の花　皆吉爽雨　松崎鉄之介

事務局長に宮下氏

俳人協会の事務局担当決まる

俳人協会では、三月四日の理事会で、後任事務局長に宮下翠舟氏を任命することを決定した。事務局の担当は次の通りである。

事務局長兼総務部長　宮下翠舟
経理部長　小山田稔雨
業務部長　三ケ尻湘風
図書担当部長　村山古郷
会長付　村井隆

俳人協会関西俳句大会

四月九日（日）午後一時　大阪市立労働会館（国電森之宮下車南西へすぐ）入場無料

講演　鷹羽狩行「数の魔力」

大会当日参会者から一句を募集、選者数名により当日句会を行います。締切り午後一時半。

俳壇ことぼれ話

故秋元不死男さんは梯子酒の名人だった。ある夜、皆川盤水と「もう一人の俳人」と三人で飲んだ。何軒か回るうちに、もう十二時近くなったので、皆川盤水は秋元不死男の身体が心配になり、通りがかりのタクシーを呼び止めて、まず秋元不死男を乗せ、横浜の同じ方向に帰る「もう一人の俳人氏」を乗せ、送りをたのんだ。

タクシーが走り出したあとで、皆川盤水は仰天した。というのは向かい側に、今、タクシーに乗ったばかりのはずの秋元不死男が立っているのである。つまり、秋元不死男はタクシーに乗るなり、反対側のドアから下りてしまったのである。

「もう一人の俳人氏」はこれを幸いと逃げてしまったのだった。めんどう見のよい皆川盤水は、それならと、とことんまでつきあって、家に帰ったら、夜が明けていた。

いまにしてみれば、なつかしい話だと、皆川盤水氏は語っている。（Q）

図書受贈者

（昭和53年2月25日現在）

村松令子　花辻会　富田みのる　織田のぶ緒　沢井弘　木村里風子　水田清子　斉藤拙夫　岡部平八郎　竹下春日　千葉政一　阿部誠文　田中平八　小林寿美女　北川白州堂　原ちあき　せゝらぎ句会　春燈桃青会　越智子則　俳人協会　會美翠苑　富田一鷹　鳩田洋一　前田吐実男　原田種芽　落合水尾　石森恒雄　国兼雅翠　柴田豊子　いなば俳句会　風鈴編集所　草間時彦　平野吉美　京都俳句作家協会　講談社　平沢幸生　醍醐育宏　坂本卑廬子　佐野美智小林三穂　塩尻青笳　宮下翠舟　神田正人　あびこ発行所　田口いと　高垣菊枝　田中秀雪　平坂万桑　斎藤紫雲　野ざらし延男　橋本静子　奈良憲　多田てりな　東沙遠　菊地麻風　羽田岳水　関谷嘶風　伊藤四郎　木田千女　市川一男　小松崎爽青　能村登四郎　山口牧村　今村俊三　伊藤恭一　横山鷹夫　山田昌夫　松本三余　中村春芳　菅生定祥　小島左京　越航発行所　中田黄葉子　白水泰夫　広岡朝子　常石芝青　五所平之助　中村定俊　堤俳一佳　山岸巨狼　池芹泉　鶴村松一　鈴木蒼海　古市爽石　森澄雄　浅井惇介　双璧社　野竹雨城　平松措大　小原俊一　池上浩山人　愛媛大学　安住敦　岡田七郎　後藤昌治　松村默飛　太田紫苑　上田都史　青木啓治　鈴木栄子

細見綾子俳句教室

講師　細見綾子　連続講議（五回）
時間　午後一時三〇分より三時三〇分まで。
会場　俳句文学館
開講日　四月十一日（火）四月二十五日（火）五月九日（火）五月二十三日（火）六月十三日（火）
受講料　全五回　四〇〇〇円（協会員三五〇〇円）　一回　一〇〇〇円（協会員八〇〇円）
申込先　俳人協会　講座係

四月二日に除幕式

故角川氏のレリーフ

文学館でパーティーも

俳句文学館建設委員長として、本館建設に多大の功績のあった故角川源義氏を記念するため、俳句文学館にそのレリーフを飾ることになった。その除幕式は次の通り行われる。ご参列をお待ちします。

なお、除幕式後、有志による懇親パーティーが行われる。ご出席者は俳人協会にご連絡下さい。

日時　四月二日（日）
除幕式　午前十一時より
懇親会　正午より
会費　四千円
場所　俳句文学館

延二〇〇余名の代表作が一堂に
全俳人・文筆者に待望の必読書
俳人協会編
四季随筆（春）
●近日刊行／B6判／定価1,500円
■何回読んでも良い作品、或は読みたくともどこにあるかわからなかった名編の数々……。俳人協会に結集する多彩な現代俳壇の中心メンバーの力作を網羅し、春・夏・秋・冬に分類して刊行する『四季随筆』！
●家作家収録（春）随筆四季●
早春
水原秋櫻子　安住敦　阿波野青畝　星野立子　岸田稚魚　上田五千石　斉藤兼輔　皆吉爽雨　渡辺千枝子　古舘曹人　勝又一透
仲春
山口誓子　石川桂郎　原コウ子　岡本眸　加倉井秋を　橋本美代子　大橋敦子　土岐錬太郎　能村登四郎　古賀まり子　鳥羽とほる　堀口星眼　相馬遷子　五所平之助　山口青邨
晩春
角川源義　石田波郷　岸風三楼　清崎敏郎　小林清之介　稲垣きくの　木村蕪城　大場美夜子　石井桐陰　鳥越すみこ　中村汀女　細見綾子　中村草田男　大野林火　富安風生　水原秋櫻子
東京美術
東京都千代田区神田司町2－7
振替／東京3－13186
電話／（03）292－3231

愛蔵用俳句辞典の決定版完成！
全七八八頁！
俳句辞典近代
松井利彦編
■慶応三年から昭和五十年までを収める。
■見出し項目として、二五〇〇項目を収載。
■編者の統一した評価のもとに、近代・現代俳句の位置づけを初めて明らかにした。
■近代俳句史概観、書き下しによる近代俳句年表、索引（書名・人名・事項）付。
■発売記念特価一六〇〇円（53年2月末限）
定価一八〇〇円
桜楓社
俳句辞典近世
松尾靖秋編　全五三〇頁　一六〇〇円
■俳句辞典近世・近代セット箱入
特価三二〇〇円（53年2月末まで）
定価三四〇〇円
〒101　千代田区猿楽町2-8-13
(291)5661　振替東京6-18020

大雪の中、稔りも大きく

第2回俳人協会札幌地区懇話会

積雪一メートルを越す大雪に見舞われた一月二十九日、遠路、多忙のところを出席された草間時彦先生をお迎えして第二回俳人協会札幌地区懇話会が、幌南クラブで定刻午後二時より開催された。出席者三十名。稔りの大きい会となった。（勝又木風雨）

札幌懇話会で挨拶する草間氏＝左へ勝又氏、菊池氏

県内各地から30名

岩手の協会員　新年懇親俳句会

小原　啄葉

岩手県内の俳人協会会員の第二回新年懇親俳句会が、去る一月八日午前十時三十分から、盛岡市大沢川原「こずかた会館」で開かれた。当日は天候にも恵れ、県内各地より三十名が集り、五十二年度の新会員は全員参加という盛況ぶりであった。

懇親会は堀米秋良氏の「会員の交流と親睦を通じ広く県俳壇の振興を図りたい」旨の挨拶に始り、第一部俳句会は池元道雄氏の司会によって進行、まず当季雑詠五句の互選を熟心に行ない、続いて新会員岩城啼月氏外八名の紹介がなされた。

互選の結果は中村奈果、戸塚時不知両氏によって披講され、特に、互選の高点を獲得された淵向正四郎「脱柵の馬がひかりとなる冬野」、中村奈果「紙を干しわずかに天へ陽を返す」、菅原多つを「風が棲む笹の日月狐鬼」の三氏に対しては俳人協会より豪華な賞品が贈られた。

第二部懇親会は菅原多つを氏が司会を担当、まず、予め幹事会において検討されていた協議案(一)会の名称を今後「岩手県俳人協会」とする、(二)本年七月下旬頃会員の夏季鍛練句会を行なう、(三)会員の年間作品集を刊行する、以上の三件について提案、全員これを了承して原案通り決定。続いて、会の健全な発展を祈念し田村了咲氏の音頭で一同乾杯。さらに菊池恒一路氏外数名による有益なスピーチが行われた。

また昨年好評を得た会員自撰の短冊交換会は今年もつづけ、戸塚時不知氏のユーモア溢れる司会によって賑やかに進行、和やかなふん囲気のうちに午後五時散会した。

全国大会や風生句碑除幕式

「若葉」創刊五十周年を記念し

長谷川浪々子記

遍信省内同好者の俳誌が活版印刷となりその雑詠選者に富安風生を迎えたのが昭和三年五月。いつか半世紀という歳月が流れた。

五十周年に当たる本年五月には風生主宰を囲み、薫育をうけた弟子達が全国各地から東京に参集、次のような内容でお祝いをすることになっている。

一、全国大会＝五月十三日（土）
上野公園内　精養軒

二、風生句碑除幕式＝五月十四日
東京都新宿区下落合（国電高田馬場下車）薬王院（牡丹寺）境内
薬王院は風生の牡丹百句由縁の寺。句碑の句は
中空に日のとどまれる牡丹かな

除幕式終了後、記念吟行会

三、その他記念刊行物

随想

木地師のふるさと

――滋賀県の蛭谷はこけし人形の発祥地である――

桂　樟蹊子

ここに木地師の轆轤発祥の神、惟喬親王を祠る筒井神社がある。

文徳天皇の第一皇子でありながら、母方の身分が低かったために皇位継承を得なかった惟喬親王は、生命さえも危い立場に置かれ、藤原太政大臣実秀郷その他数名の従者と共に都をのがれ、この地小椋庄筒井畦にやってくるのである。

親王たちは、このあたりの樵たちに守られるのであるが、親王は樵たちの貧しさを救うために、轆轤の工法を教える。木地椀が最初だということである。木材で食器が出来、さらに盆、膳その他のいわゆる挽物（ひきもの）が作られることになる。その間は、トチ、ブナ、ケヤキ、サクラなど広葉樹材が主であってやがて小椋庄は千軒を越える盛業となるが、その後用材の不足を招き、また各地の需要に応じて木地師たちは日本各地へ分散してゆくようになる。

また木地に対する漆塗が併行して、塗師の業が発達してゆくことになるのである。

こうして蛭谷からさらに奥深い君ケ畑にかけての一帯は、木地師たちのふるさとになるのである。

惟喬親王が考案された轆轤は木工ばかりでなく塗師の発達を促進し、また陶器製作、さらに旋盤工業の発展ともなる。

小椋庄、つまりこの地蛭谷からあまり遠くない蒲生野を領した蒲生氏郷は、安土桃山時代の武将であるが、信長、秀吉に仕えてやがて会津百万石の領主にあって、やがて小椋庄は千軒を封ぜられる。その蒲生氏郷が、小椋庄の小椋の名を呼ぶことになり、その子孫に小椋姓を伝えるのである。

蛭谷の過疎を今も守っている小椋敬雄さんは、私に「轆轤のふるさと筒井」の一書を下さって「何とかして木地師たちを村に戻したい」と念じ、筒井畦の傍に皇（すめら）学園を建設されて書道のメッカにするため小椋庄に、いまひっ生の事業を進めていられ、また木地師の大蔵昭二さんを蛭谷に定着させて、昔の夢をもう一度この地に取戻そうとしていられる。

筒井神社の社殿の前には「東京都江東区挽物工業組合」「名古屋木工挽物工業組合」などの紙片と水引をつけた神酒の瓶が供えてあった。今でも筒井神社は、このように全国の木地師あるいは木工挽物にたずさわる人々の信仰を集めている祖神であるが、神社の入口には、惟喬親王神講本部という大きな門標を懸けた建物があり、木地師たちの信仰の中心となっている。

筒井畦は蛭谷からさらに奥へ登ったところ。その傍らに惟喬親王陵墓地という平らな場所と石組が遺っており、また陵の墓石の輪塔が立ち、昼もなお暗い杉木立が囲んでいる。前記皇学園はその畦の手前に建っている。

蛭谷は、この筒井畦へゆく道と、さらに鈴鹿山系深い君ケ畑へゆく道との岐路にある村であるが、昼谷川の滝のように落ちてゆく水勢は、深谷にそうそうとこだましている。この川は木地師たちの斉戒沐浴の川で、この付近では今でも不浄や洗濯を禁じている。岩魚がすんでいるそうである。

山蛭や谷の要に木地師神　樟蹊子

筒井神社の祭は、四月五日である。

創刊号物語〈8〉

若葉

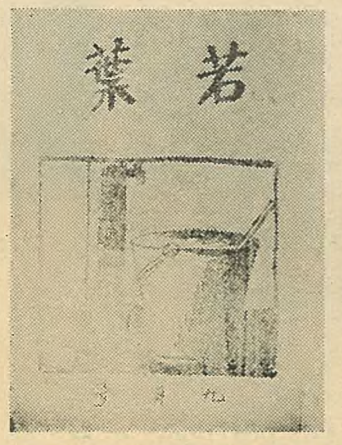
東京方、大阪方に別れた〝神話時代〟

若葉年刊句集一九六一年の「若葉年譜」には、大正十四年、板東稀村らにより大阪にて創刊。昭和三年五月、大江兎久郎、山崎魁堂らの斡旋で発行所東京移転。雑詠欄を設け富安風生その選に当たる。これをもって実質的創刊とみる。昭和八年一月、第三種郵便物認可。昭和十一年八月、百号記念特集号。

編集発行関係者＝山崎魁堂、中道邇音、三橋蕪人、道野滓堂、伊東岸朗。という記事がある。

若葉という名の俳誌が創刊された大正十四年には、私は大阪に在勤していたので、たしかに板東稀村らという複数の中の一人であった。その当時、稀村は課長、私はテンエージャーの平局員、たしか係長であった林芳郎が最初の編集者であった。俳句作家には、木村悠々、河村三田郎、諏訪希世史、服部影法師などがおり、雑詠選者は、影法師の兄という縁で、朝日新聞記者で僧鳥同人の服部無山人が当たっていた。無山人は初期のホトトギスの二千句投句時代、十数句も採られて巻頭を占めているくらいの実力のある俳人であった。

創刊当時の前期若葉は二十頁くらいで誌代は月十銭であった。後に課題句欄を設けて、本省の課長であった富安風生に選をしてもらったが、東京方の作者、兎久郎、魁堂、岸郎それに大和青城、田辺むさしなどは、この課題句にだけしか投句せず、私たち大阪の者だけが無山人選をうけるといった、全く奇妙な職場俳誌であった。風生はこれを若葉の神話時代と言っている。



東和十一年八月発行の百号表紙

実をいうと、若葉にはまだその以前があり、私は大正八年大阪で入局、そのころ稀村が課長になって他所から転勤して来て、句会を始め、私も誘われて入会した。大阪の貯金局は文芸に因縁があり、中村春湖（井伊大老の死で有名な戯曲作家中村吉蔵）と稀村が机をならべたこともあり、その後、映画「籠の鳥」のシナリオを書いた佃血秋も事務を執っていたこともある。稀村の始めた句会といっても親睦を主としたいわゆる職場句会で、句会後花札をやったりするといった今日では考えられないようなものであったが、その句会の作品を複写機でコッピーしたものが、実は今日の大若葉の濫觴であったのだ。

その後八頁くらいの小誌になり、局内に配付されるようにはなったが、俳句を主とし、短歌、川柳も併載されるといったものになった。そして何年か経て俳句だけのものにしたのが、大正十四年創刊の若葉なのである。そして約三年後、東京方の「課題句（風生選）」の方が優勢になり、大阪方から発行を引き継いで独立したのが、昭和三年五月創刊の大江兎久郎編集、山崎魁堂発行担当の誌代二十銭の職場誌「若葉」である。私は無山人のゆかりもあって、松瀬青々主幹の「僧鳥」に拠り食しいながら作品活動をはじめていたので、はっきり袂を分ったつもりでいたところ、新たに徳島に貯金局が出来、稀村が初代局長になり、稀村の声がかかってか私も開局要員としてつれてゆかれ、加えて直上の課長が東京から来た田辺むさしであった故もあって、ふたたび若葉に席を置かざるを得なくなった。しかし稀村という人は偉い人で、徳島の自宅で毎月句会を催し、木太刀の木下眉城、石楠の今枝蝶人、矢島無月、ホトトギスの小山白橋、馬酔木の佐野まもる、天の川の坂東章など有為の作家を集め、私も大いに勉強になった。

ともあれ、当時俳誌をもっていなかった富安風生を主選者としてひっぱり出し、若葉新生に成功した大江兎久郎は夭折し、山崎魁堂も逝ってしまった今日、次いで編集者となった伊東岸朗こそ当時の苦心談を語れる唯一人の生き残りであろうが、惜しむらくは早く俳句をやめてしまった。しかし虚子歳時記に俳句を遺しているのはせめてものことであるとおもわれる。小誌であるのに第三種認可の早いのは郵政部内誌である故もあったろうし、大冊の百号特集を出すまでは、職場俳誌にすぎなかった。

当時の中心人物邇音、滓堂、青城、むさしなどは相ついで逝き、蕪人、岸朗も去った。私の上京は昭和十二年で、直ちに若葉と関係をもったが、風生はこの頃退官していよいよ俳句に進み、昭和十三年部外者長島千城が編集者となるにおよんで、それまで風生のかくし児的存在であった若葉も、結社俳誌としての実相を俳壇の一角に示現するに至ったのである。それにしても、創刊以来六百号になんなんとする今日まで、うまずたゆまず俳句をつづけているのは風生先生と私だけというのはちょっときみしいことである。

（西本　一都）

岐阜県文化奨励賞

近藤氏が受賞

俳人協会評議員、「浜」同人会長・近藤一鴻氏は、このほど句集「輪」とその全業績に対して岐阜県文化奨励賞が贈られ、去る二月二十五日、岐阜県庁で授与式が行われた。

特別講座

近代俳句の歴史

正岡子規から現代まで

俳句文学館図書担当者教育のための講座です。余席がありますので、一般からのご参加をお待ちします。

四月末開講　月二回（予定日は次号に発表）毎回午前十時より十二時まで。

講師　草間時彦　村山古郷ほか

受講料　一回　五百円

二月二十四日に開催

俳人協会評議員会

去る二月二十四日、俳人協会評議員会を開催、各地より評議員各氏が集り、活発な意見が交換された。詳報は次号でお伝えする。

俳句文学館臨時休館のお知らせ

来る三月二十八日（火）は俳句文学館創立記念日となりますので、臨時休館と致します。俳人協会も当日は休務となります。

第十七回　全国俳句大会御案内

俳人協会主催（朝日新聞社後援）の全国俳句大会は俳壇の主な結社が合同して、しかも全国的な規模で行なう俳句大会です。奮ってご応募願います。

◇募　集＝三句一組（雑詠・未発表のもの。二百字詰原稿用紙使用▽何組にても可。

◇会　費＝一組につき千円（現金書留又は小為替）

◇締　切＝五月三十一日（当日消印有効）

◇送付先＝東京都新宿区百人町三―二八―一〇（〒160）
俳人協会「全国俳句大会」係あて。

◇選　者＝水原秋桜子・富安風生・阿波野青畝・山口青邨・山口誓子・中村草田男・阿部みどり女・中村汀女・星野立子・大野林火・安住敦・石塚友二・有働亨・遠藤梧逸・加倉井秋を・岸風三楼・岸田稚魚・木村蕪城・清崎敏郎・小林康治・香西照雄・沢木欣一・進藤一考・鷹羽狩行・千代田葛彦・野沢節子・能村登四郎・橋本鶏二・原裕・平畑静塔・福田蓼汀・細見綾子・松崎鉄之介・皆吉爽雨・村山古郷（順不同・一部交渉中）

◇発　表＝九月二日（土）
午後一時より、朝日新聞社東京本社（入場無料）

◇賞　＝入賞者には文部大臣奨励賞・俳人協会全国俳句大会賞・朝日新聞社賞・各選者の特選句には賞品。

◇講　演＝清崎敏郎・戸板康二

☆募集句は選者の一部で予選を行ない、大会終了後一ヵ月以内に応募者全員に入選作品集をお送りします。会費の受領証は発行いたしません。

☆なお、大会当日参会者より一句を募集、出席選者数名による選を行ない、特選句には賞を呈します。（投句締切一時半・会費無料）

昭和五十三年三月

主催　社団法人　俳人協会
〒160　東京都新宿区百人町三―二八―一〇　俳句文学館内

後援　朝日新聞社

「連句の集い」好評につき　継続開催

場所　俳句文学館

日時　三月十一日(土)四月八日(土)五月十三日(土)
六月十日(土)七月八日(土)八月十二日(土)
各第二土曜日午後一時より四時三十分まで。

指導　阿波野青畝郎ほか

会費　八百円

町春草書道教室

指導　町春草

会場　俳句文学館

時間　午後一時三〇分より四時

開講日　毎月第二月曜　第四月曜　受講料　六カ月（十二回）一五〇〇〇円（ほかに教材費若干）

申込先　俳人協会　書道教室係

俳句カレンダー鑑賞

〈三月の句〉

雛まつりしづかなる日の海荒るる

阿部みどり女

この句は第三句集「光陰」に出ているが、俳人協会から刊行された、自註現代俳句シリーズ阿部みどり女集にも出ていて、昭和三十二年の作、〈海近くの家の雛まつりに居合せたときの句。旅にあって、家の中は至って静かな雛祭りであるが海は荒れていた〉という自註がある。

これで充分と思うが少し蛇足を加えるならば、作者は海が好きで、卒寿を過ぎた今でも、誌友の車でよく海へ出かける。だから海の句に佳品が多い。この句もそうした折に作られた海の句の中の一つかと思ったが、二十年も前の作品だから、作者がよく旅に出た頃のものということになる。

三十二年の作品には、山口とか祝島といった前書のある句が見られ、それらの句の中にこの句も並んでいるところから、瀬戸内海を前にした家の雛祭りに出会ったときに作られたものであろう。

荒れていた天候が納まって、穏やかな日和が戻ってきた。たまたまその日が雛の日であって、訪れた家には雛が飾ってあった。広い家が考えられる。日和ばかりでなく家の中も静かであった。連れた二階から海が見えた。その海は荒れていた。昨日までの天候が想像できる。こうした意外性は俳人にとってまたとない収獲である。作者はその意外性に興味を覚えたのであろう。料峭のころの季節感がよく出た、雛の句としては珍らしい句だと言えるのではないだろうか。

（八木沢　高原）

大いなる月の出てゐし桃の花

岸　風三楼

先生の日記に「昭和四十八年四月三日、岡山市郊外佐山に桃の花を訪ね、吉備路探勝」とある。その折の作品に「谷川のふくらみ流れ桃咲きぬ」「幾超伏桃の花畠天に入る」等十数句と共に「春嶺」四十八年七月号に発表された一句である。平明にして豊醇、一幅の日本画を見る思いである。これ以上単純化し得られない、写生の源流と言ってもいい。おそらく即触発的に生れたものかも知れないが、「大いなる」は決して安易な言葉ではない。如何にも桃咲く景にふさわしい平穏な思いがとめられている。また梅でも椿でもなく「桃の花」であってこそ素朴な村乙女の匂うような情趣が生じていることに気付く。

先生の御郷里は岡山、しかもこの句の生れた吉備神社にほど近い桃の里に生れ育ったのである。けだし、人を得た一句と言ってもいい。

実は一昨年四月十日、小寺冬至さんを中心に岡山春嶺会主催の「吉備路、桃の花を探る集い」に私も先生と共に参加しこの桃源郷に一日を遊んだ。幾重にもたたなわる桃畠は花も盛りで、空との境も曖昧であった。近く遠く鶯も啼いていた。掲出句の背景である。

（蒲　あや）

俳人協会 新人賞について

作左部月之介

協会に加入しまして、まだ一年生なので近視眼的か知れませんが、辺境の小輩には、何かもの足りないものがあります。

これほどマンモス化した組織で、一人一人の納得を得る事は、何に依らず至難な事でしょうが、それぞれの会員に、せめて、加入せる意義ぐらい徹らなくては無意味なものと思われます。

文学館前々号によりますと、新たに新人賞を設けられたとの報がありましたが、内容を見ますと、従来の協会賞と、二重的・副次的なもので、いわゆる雲上人の独占するところのものようです。

一体句集なるものは、いくたりの俳人が、どれほど発感し得るものでしょうか。中央ならいざ知らず、身辺を見回しても、数多い有能俳人の中、一人として知り得ません。もしあったとしても、それはささやかな己れへの里程を示すものであり、決して世に問うという筋のものではありません。

このように見たとき、せっかく設けられた新人賞のアイデアを、もっと広く門戸を開放してはと思うのです。よしんば提出句数は二百句でも三百句でも結構です。

これは決して、応するから、とかく、また欲しいから、というのでは・なく、会員たるもの全員に「可能性」を与えるという事なのです。そしてそれは上意下達の一方通行の弊を無くする事に、つながるのではないでしょうか。

あるいは、このような目的を持つものに、全国大会があるでしょうが、これとて限られた人々より参加出来ませんし、また大会俳句というものは、その普遍性において別のもののようです。

せっかく御高名な諸先生方が考えられた事ですから、も早それは動かし難い事でしょうが、それはそれとしても別に、新らしい全員参加の、なんらかを考慮すべきと思惟されるのです。膨大な応募数があっても、膨大な選者先生に事欠かないことも本協会の強味と思われます。（建国の日に）

会費払込みのお願い

すでに会員諸氏のお手許に会費払込みのお願いが届いていることと存じますが（本年より年八千円）、なるべく早く、お払込み下さるようお願いします。

また、本年より金十五万円を払い込めば、終身、会費払込みを要しないという制度も出来ました。詳しくは事務局にお問い合わせ下さい。

昭和五十三年三月

社団法人　俳人協会
事務局会費係

◇俳壇消息

追悼

昭和52年

遠藤夕星子（7・3）馬酔木
家木草平（7・16）春燈
木村朝雪（10・11）雨月
橋本禾牛（10・27）花蓮・河
近藤馬込子（11・18）浜
大久保九山人（11・20）天狼
波多野海風（11・23）さいかち堂前杯芽（11・23）桜
栗田九霄子（11・25）鶴
羽田双川（12・10）若葉
小佐田忠男（12・11）馬酔木
伊沢三大樓（12・12）若葉
中森蕃扇（12・12）年輪
萩原江月（12・23）若葉・岬
河西春海（12・28）ぬかご

昭和53年

斎藤臥龍（1・5）俳文学
長谷川玉夫（1・14）河・石人
粳間ふみ（1・31）馬酔木
中村若沙（2・28）いそな

編集室から

三月三日、俳句文学館のカウンターに立った女性の会員の人が、いきなりいった。

「俳句文学館にはおヒナさまはお飾りしてないのですか」

「申しわけありません。無いんですよ。そう思ってはいるのですが……」

「今夜の句会にヒナ祭りという題が出ているものですから……。ここへ来れば句が出来ると思ったのです」

その人はえん然とほほえみながらいった。

「わたくしも戦争まではいくらかいいものを持っていたのですが、焼いてしまって……」

ヒナ祭りのヒナ、端午の節句の武具、俳句文学館としても揃えなければいけないことはよく判っているのだが、買うとなれば変なものは買えないし、考え込んでいるところである。

本号は俳人協会の総会記事の速報をするために、発行を十日ほどずらせた。新会長の挨拶などは次号に掲載する予定。新陣容による俳人協会、よろしくご協力願いたい。

来月号は、いつもの通り、四月五日ごろにお手許にお届けする。

夜々おそくもどりて
今宵雛あらぬ　民郎（草）

おわび　前号「春夏秋冬」中の作品で「勉学」とあるは「晩学」の誤りにつき訂正いたします。

季節の窓

早春

雪嶺には雪雲が流れていたが、桑畑に残った斑雪に射す日は春めいて明るい。若木なので括らないのだろう、細い枝がすいすい伸びて、フォトジニックな線である。小海線、小淵沢付近。

（文・写真　岸田　稚魚）

銀座の画廊で盛況に終わる

石塚友二俳句展

開会パーティーでの石塚氏

石塚友二俳句展は、さる二月二十日から二十八日まで、東京・銀座の「四季画廊」で開催された。

期間中、かなりの人々が訪れ、盛会のうちに終わった。

「自註現代俳句シリーズ」より抜粋

『清崎敏郎集』より

残雪を日ざしが通り過ぎにけり

昭和四九年作

比叡山の元三大師堂の門を入ったところ。掻かれた雪が軒近くまでうず高く積まれていた。その上を日ざしがすうっと通っては消えた。

『上田五千石集』より

雁ゆきてしばらく山河ただよふも

昭和五〇年作

これも鰍沢。頭上を雁が棹をなして過ぎていった。行方には八ッ岳が霞んでいた。

『原裕集』より

桃咲くと風の中なる一童子

昭和五〇年作

桃の花に女の子を出すのが常識かと思うが、何故か風の童子が出てくる。桃の花便りを女の子にもたらす山の童子。

自註現代俳句シリーズ

第二期四十冊（五十音順）

安住敦集、井沢正江集、石原舟月集、石城暮石集、遠藤梧逸集、及川貞集、大橋敦子集、岡田日郎集、岡本眸集、加倉井秋を集、桂樟蹊子集、亀井糸游集、草間時彦集、小林康治集、斎藤玄集、沢木欣一集、下村梅子集、鳳蒲あや集、進藤一考集、田村了咲集、高木晴子集、龍岡晋集、千代田葛彦集、徳永山冬子集、中山純子集、西村公鳳集、西本一都集、能村登四郎集、野見山ひふみ集、古館曹人集、星野立子集、堀口星眠集、松崎鉄之介集、松村蒼石集、村越化石集、山口波津女集、山田みづえ集　ほか交渉中

装本、編集などすべて第一期に準じます。

第一回発売　昭和五十三年七月　以後毎月三冊ずつ刊行

一冊　八八〇円（送料一二〇円）

全四十冊一括申し込み三万円（送料共）

一万五千円ずつ二回分割支払をご利用下さい。

第一期近刊予定

三月刊　清崎敏郎集　上田五千石集

四月刊　大野林火集　原　裕集

なお、品切中の「細見綾子集」「皆吉爽雨集」「鷹羽狩行集」の再版が出来ました。

東京都新宿区百人町三―二八―一〇

申込先　社団法人　俳人協会

電話　〇三（三六七）六六二一番

振替　東京　六―二七三番